

内

四拾人 勇吉引請

代五メ六百六拾四分

残分 四拾人

内

拾貳人 上

拾參人 中

拾五人 下

本庄屋

右ハ成瀬主殿守様御通行被遊候ニ付相当の申候別半分売、半分割符仕候 以上

十月十六日

一、馬 六匹

善師野宿

内

貳匹 上

貳匹 中

貳匹 下

本庄屋

右ハ御家中様御通被成候付相当申候別割符致候

以上

※ 文中 上(上小口)・中(中小口)・下(下小口)を示す。

以上の古文書からわかるように善師野宿へ人足および馬がかり出されていたことがわかる。

第七節 宗 教

概 況

慶長以降徳川幕府による政治勢力の定着によつて、人々ははじめて戦乱の苦しみから逃れて、わずかながらも生活にゆとりを見出し、各種産業の生産が上昇していきざしが見られた。

これは武士支配の社会というきびしいわくはあつたが、その土台となる農民にも、人間性を少しずつ取りもどすことができたといえよう。なかでも精神生活の面で、宗教界の動きが活発になつてきた。

室町時代から尾張美濃は、禅宗のさかんなところであつた。これは当時の支配者武士の領主が保護奨励したことが大きな理由であるが、とくに美濃は禅宗（臨済宗）がさかんで、多くのすぐれた禅僧があらわれている。

隣接の扶桑町南山名出身の悟溪宗頓は、応永二二年に生まれたが、その八十五年の生涯に、美濃、尾張に禅風を宣揚した功績は大きかつた。

宗頓は、勅をうけて、京都大徳寺、妙心寺に移り、のち犬山瑞泉寺、岐阜瑞龍寺に住んだが、土岐氏、斉藤氏の保護をうけた。

また大久地城主織田遠江守広近の帰依をうけ、当時の小口村に徳林寺を創建した。

悟溪宗頓の法脈は広大で、臨済宗東海派としてその宗風をあげ一世を風びした。

また悟溪につづいて、徳林寺の住持となつた寿岳は僧堂（道場）をつくつて、禅風を揚げこれを寿岳派といい美濃尾張禅宗界の主流となつた。

禪宗は、その教義の深奥さと、戒律のきびしき、端的な宗風によって、武士層に浸透しその保護によって、興隆したが他方、浄土教による浄土宗、浄土真宗（一向宗）が、教義の安易さをもって一般農庶民に信仰されたが、戦乱の中に生きる庶民は、やがて宗教を介して団結し、一揆を組織にして武士階級に対抗する風潮があった。

以上が室町時代、戦国争乱の社会における宗教界の概要であった。

江戸時代になって宗教界に大きな波紋を投じたのは、キリスト教の伝播である。これは従来抑圧されてきた民衆が外来の宗教思想に救いを見出したもので、信長の奨励などによって一時に流行したものである。

信長は、西洋の文化に対してすぐれた感覚をもっており、鉄砲や西洋戦術をとり入れることによって全国制覇を成しとげたが、一方一向宗などの反抗に対して西洋渡来のキリスト教を広めることによって、これを弾圧せんとし、キリスト教を大いに奨め学校、教会をたて、宣教師の渡来を許して、その布教に保護をくわえた。

信長の意をうけて大名の中にも、細川、明智、大友氏のごとくこの宗教を信仰するものも現われ、その宗教を黙認したので、西洋渡来の宣教師の熱意とあいまって、激しい勢いで拡大していった。

とくに信長の直轄地であった美濃尾張では、公然としたキリスト教の宣教が行われ、民衆の中に浸透していった。その中心は岐阜であり、一宮でもあった。

大口の地域においては、河北（こざた）、小口（みぐち）、余野、大屋敷などにその信者があったことが、当時の文書にのこっているが隣接の扶桑町地内、柏森、下野、高木、山名には何百人という信者があったと記録されている。

信長の死後、秀吉は貿易の利を狙ってキリスト教には一応信長のやり方を踏襲したが、やがてキリスト教禁止にふみきり、家康もこれにならった施策をとった。

しかし家老の代に九州天草の乱があり、キリスト教による民衆蜂起を恐れた幕府は、徹底したキリスト教潰滅の方針をたて、これをきびしく弾圧した。

このためにこの地方においてもつぎつぎと、宗徒の検挙が行われたが（寛永八年、同一二年、正保二年など）当時尾藩藩においては必ずしも決定的な掃討手段をとらなかつた。

これは一説に、犬山城主であり尾張藩付家老であつた成瀬正虎がキリスト教信者であつたため、それへの遠慮があつたのではないかといわれる。

成瀬正虎が万治二年に薨ずるや、大弾圧にふみきつたようである。すなわち、寛文元年（一六六一）江戸旗本であり、濃州惟子村の地頭林権左衛門が尾張藩へ使者を出して、自分の領地内の信徒の検挙を申入れたことを端緒として、尾北一帯におけるキリシタン宗徒の大検挙が行われた。

とくに犬山藩内においては、五郎丸を中心として信徒が多く、つづいて高木、下野村に多かつた。

寛文元年三月以降二十人、三十人と捕えられ、これらはほとんど名古屋へ送られたと記録されている。

高木村では、寛文五年正月までに三十世帯八十二人が捕えられ、ついで斉藤、柏森村そして小口村とつぎつぎに捕えられ、尾張藩では入牢者七五六人、この中で半数は死刑に処せられたようである。

幕府や、尾張藩ではキリスト教を根絶するために、

- 1 信徒の改宗（ころび）を求め、これに従わない者は死刑にす。
- 2 信徒の探さくにつとめ、信者を訴人した者に賞を与える。
- 3 五人組をつくつて隣近所共同責任において、信者の防止、探さく、訴人につとめる。

4 他国よりの移住を禁ずる。

5 それぞれキリスト教に関係のない宗旨にはいらせ、且那寺を決めて、その檀徒であることを強制する。

6 宗門改め手形を作つて、その身分を明らかにさせる。

7 うたがわしいものには、嚴重な取調べをする。

こうした多くの方法をもつて、この根絶を圖つたのでキリスト教信者も、寛文八年より同一〇年に至るころにはほとんどその影をひそめるに至つた。

他方、神は仏教、儒教、キリスト教の如く、偉大な思想家の考えを受け入れて、自らの精神的な幸福を得ようとするものでなく、單純な祖先崇敬にもとづく民族的（血族的）なものである。

すなわち、血族の集団が開拓し生活する中で、その支配者を囲んで共同の利益を得ていくために、自然發生的に生まれた宗教である。

したがつてそこには、具体的な個人とか思想は大きな存在理由とはならない。そこには生活をともにする人と、土地があればよいのである。

人々がその生活を生んだ祖先への崇敬の心を広げ、のこしていく中で、郷土の團結を強めていくのである。

近世においても、おなじ土地の共同体の鞏帯として、神社信仰はその力を失つてはいなかつた。

とくに、中世戦国争乱期のあとを受けて、各地に開拓、新田の發生を見るに至つて、人々がかつての祖先の地の氏神を新開地に勧進して、同族の意識を強化し團結の表徴とした。

近世において各地には、新しい開拓民とともに新しい神社が祀られた。

当地は、この時代において、とくに開発が進み、数多くの新田が生まれたが、そこには出身地の氏神から勧進した神社が生まれ、その祭神も多く、かつての氏神と同じであるのも、これらの理由にもとづくものである。

表2-19 近世に創建された寺院・神社（大口村誌より）

寺院名	本 尊	宗 派	創 建 年 月	開 基	所 在 地
桂林寺	聖観音	曹洞宗	寛永元年(再建)	桂林	御供所
地藏堂	延命地藏	〃	享保年間	堅成舜豊	東奈良子
長松寺	薬師如来	曹洞宗 通幻派	元禄七年七月	傳 東	大屋敷
円応寺	釋迦如来	曹洞宗 総持派	宝 曆 八 年	円応祥徳居士	萩 島
薬師堂	薬師如来	〃	天正十一年創立。その後 (年代不詳)現在地へうつる	不 詳	上 小 口
大師寺	十一面観世音	臨濟宗妙心寺派	文化九年三月	〃	竹 田
観音堂	観世音	〃	慶 長 五 年	〃	余 野
〃	十一面観世音	〃	寛政九年二月	領国院寮外円中居士	河 北
釋迦堂	釋迦如来	浄土宗	天保七年	泰誉安窓貞穂法尼	替 地

※ これらのほか町内では辻観音・辻地藏がこの時代に多く建立されたと考えられるがいずれもその沿革は不詳である。

神社名	祭 神	創 建 年 代	所 在 地
天神社	菅原道真	天保十四年	秋田字東郷前一
八王子社	天之忍穂耳命ほか	元和九年四月	〃 郷裏六八
神明社	天照大神、豊受大神	慶長四、五年頃	大屋敷字坂小淵二五
〃	天照大神	近世初期(正徳五年九月再建)	秋田字宮東八六
熊野社	伊邪那美命	近世初期(寛文二年再建)	〃 字中山五九
神福社	天照大神ほか	近世初期(元禄元年再建)	豊田字福田六五

※ 近世において創建されたことが明らかでない町内の神社はこのようであるが(大口村誌による)このほか近世に開発された新田の産土

(氏神)は、ほとんどの時代に勧請・創建されたと考えてよい。

またこの時代には、八剣社・小口神社・余野神社・白山神社・三明神社・神明社など町内の多くの神社が再建・改修されていることが棟札によって確認される。

第四章 近代史

第一節 明治・大正時代

第一項 行 財 政

村の分合 と機構 の概況

明治維新における諸制度の制定、変革は地方自治行政への胎動をみた。

すなわち、明治二年（一八六九）、支配権の新政府への移行を旗印に施行された版籍奉還にはじまり、明治四年七月、中央集権の確立を目ざし実行された廢藩置縣、そして大小町制、郡制、町村会法、町村制の施行などめまぐるしい変革は、地方自治を統一的な中央集権の下に統括し近代国家への進展を目標とした。

こうしてはじめられた地方自治は、庶民の期待するところが大きかったが、制度そのものが官僚的であり、旧藩政時代との変化はあまりみられず、県・郡・市町村は中央集権政治のための下部組織的な性格が強かった。

すなわち、幕府体制の倒壊によって、中央の急激な前進とは別に地方には、未だ旧藩時代の行政意識が強く残っていて、それが維新の施政方針の抵抗となることが多かった。